うちゅうせん　ナミごう

今は２２×〇年。だれでも、うちゅうせんにのって、うちゅうをじゆうにたびすることができる。

木星の第３えい星イオには、国さいうちゅうき地がある。ここと地きゅうをむすぶのが、うちゅうせんナミごうだ。ナミごうは国さいうちゅうき地にさまざまなにもつをとどけたり、たいいんをはこんだりする。

うちゅうせんナミごうのクルー（のりくみいんのこと）は10人。

こんどもナミごうは、はじめから数えて８回目のにんむを終え、地きゅうにむかうところだ。

地きゅうまでは、かた道31日と13時間かかる長たびだ。

うちゅうへいったんとびだすと、あとは地きゅうへまっしぐら。コンピュータがナミごうを自どうそうじゅうしてくれるので、クルーのしごとはあまりない。ときどき、きかいがちゃんとうごいているか、てんけんをするぐらい。

ナミごうでは、水がとてもだいじだ。のみ水につかうだけでなく、せん内の空気や電気も水からつくる。「水そ」というナミごうのロケットねんりょうも水からつくる。

だから、ナミごうのせん内では、クルーがかってに水をつかうことはゆるされない。クルー一人がつかえる水のりょうは、きびしくきめられているのだ。もしも、水がなくなると、うちゅうせんはうごかなくなり、うちゅうのはてまで、ただようことになるかもしれない。

『すきなときに水がつかえないなんて、今の時だいにまちがっている！』と、クルーみんなが心の中では思っていたが、口に出すものはだれもいなかった。

そんなあるとき……

「ああ、もうげんかいだあ！」

クルーの一人、ラモたいいんが言った。

「がぶがぶ水がのみたいようー。そうだ、

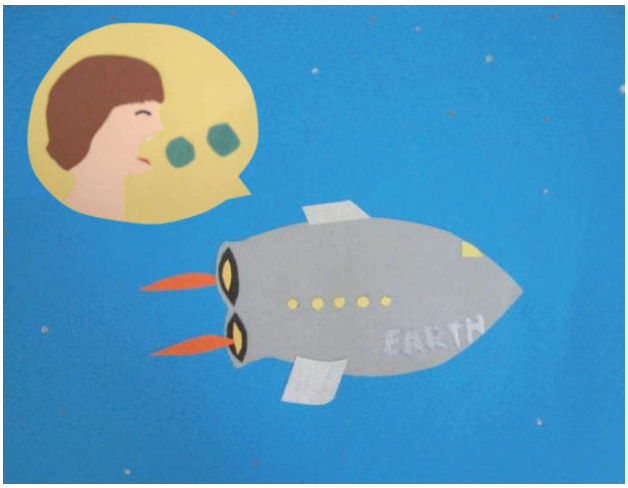
タンクから水をもらおう。

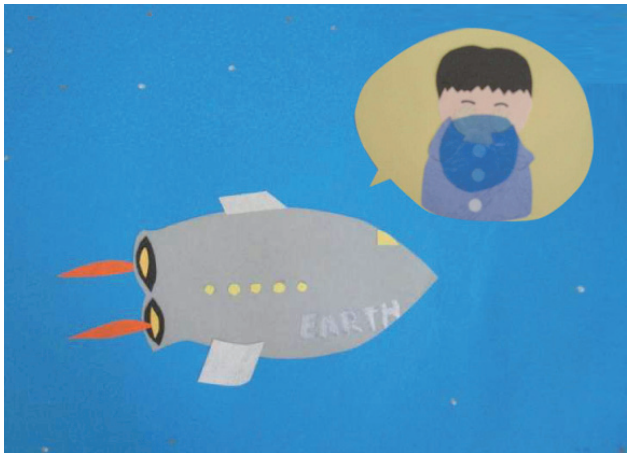
なあに、ぼく一人だけなら……。」

そおっとタンク室に入って、コックをあけて、

（え！水がこぼれるって？だいじょうぶ。

ここはうちゅうなので、水はこぼれません！
空中でボールのようになって、ういているのです。）
ぱくっ、ごくっ。
ぱくっ、ごくっ。
ぱくっ、ごくっ。
「ああ、おいしい。やっぱり、水ボールは、
ぱくぱくっとやらないとねっ！」





「ああ、もうがまんできない！」
クルーの一人、ペポたいいんが言った。
「じゃぶじゃぶ、顔をあらいたいよー。そうだ、
タンクから水をもらおう。
なあに、ちょっとだけ……。」
やっぱりそおっとタンク室に入って、
コックをあけ、顔をじゃぶじゃぶ！
「ああ、さっぱりした。つかった水は、

こうやって、ぽい！」

ダストシュート（うちゅうせんのごみばこ）へよごれた水ボールを入れると、

（みなさん、水ボール、もうおわかりですね。）自どうてきにうちゅうへとびだすしくみ。

うちゅうへすてられた水ボールは、あっという間にこおりボールになって、見えなくなってしまった。

「ああ、もうなんとかしたい！」

クルーの一人、ハナたいいんが言った。

「ごしごしせんたくがしたいよー。そうだ、タンクから水をもらって……。

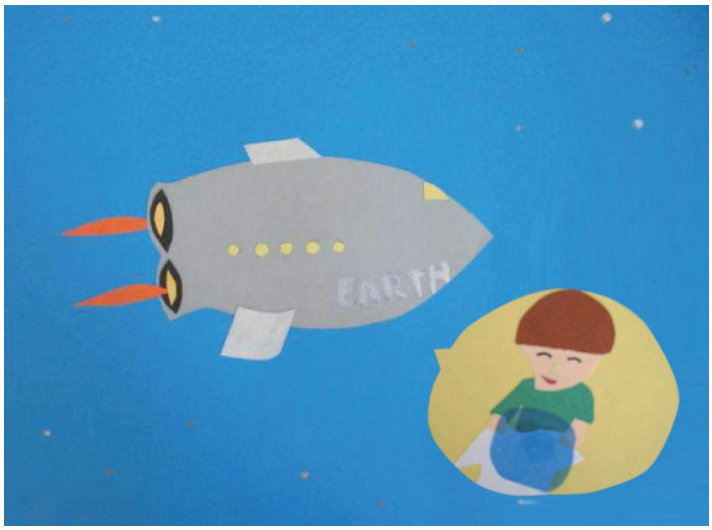
ぼくだけじゃないよ。知ってるんだ。

みんなだって……。」

タンク室に入って、コックをあけ、大きな水ボールにせんざいをまぜて、シャツをごしごしごし。

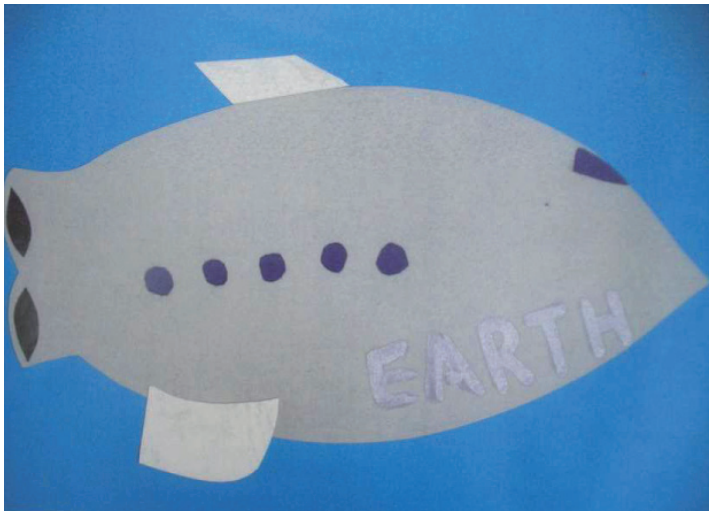
こんどは、すすぎ用の水ボールで、ざぶざぶざぶ。

「ああ、せんたくって、気もちがいいな。」



よごれた水ボールは、ダストシュートからぽい！
すぐにこおってこおりボールがびゅーんとうちゅうへ。ナミごうだいじょうぶかな？

「キンキュウジタイ、ハッセイ。キンキュウジタイ、ハッセイ。キンキュウ……。」
ナミごうのコンピュータが、きけんを知らせた。
「どうしたんだ！　なにがあったんだ！」
おどろいたクルーたちが、コントロールルームにあつまってきた。
「ウチュウセンニハ、モウミズガアリマセン。
マモナク、エンジンガトマリマス。」
「そんなばかな。どうして水がなくなったんだ。」
キャプテンがさけんだが、こたえるものは
だれもいなかった。
「地きゅうに帰りたいよう！」
「たすけてよう！」
エンジンの音がとまり、せん内のあかりが消えた。
「もうだめだあ！」



クルーみんながあきらめかけたとき、
『ナミごう、おうとうねがいます。こちらは、
うちゅうパトロールせんスクエアワンです。
ナミごう、おうとうねがいます。』
ひじょう用む線そうちに、うちゅうパトロールたいから
れんらくが入った。
「やった、たすかるぞ！」
「こちらナミごう、きゅうじょをねがいます！
こちらナミごう、きゅうじょをねがいます！」

やがて、ナミごうに、うちゅうパトロールせんスクエアワンがゆっくりと近づいてきた。

（和井内　良樹　作）

うちゅうせんナミごう
（低学年 4-（1））

（1）ねらい

集団を意識し、約束やきまりの大切さに気づき、これらを進んで守ろうとする態度を養う。

（2）資料の特質

宇宙船ナミ号にとって、「水」の確保は生命線ともいうべき大切なことである。きまりとは知りつつも、水を勝手に使ってしまったり、過ちを後悔するクルーたちの心の内をじっくり考えさせる資料である。きまりの背景には、そのきまりによって成立する集団＝「みんな」の存在があり、自分を含めた「みんな」のためにきまりを守るということの大切さに気づかせ、ねらいに迫りたい。

（3）展開例

1　身の回りのきまりについて話し合う。

2　資料「うちゅうせんナミごう」を読んで話し合う。

①みんなはどうして宇宙船のきまりをやぶったのか。

・自分だけじゃない、自分一人ぐらいと思ったから。

②キャプテンが叫んだが誰も応えるものがなかったとき、みんなはどんな気持ちだったか。

・自分のことしか考えていなかったな。

・自分のせいでこんなことになってごめんなさい。

③救助されると知ってみんなはどうしようと考えたか。

・みんなのことを考えてきまりを守ろう。

3　きまりを守るよさについてクルーに手紙を書く。

4　クラスの映像を視聴する。

○クラスの一員として活躍している場面を提示し、集団への帰属意識を高め、きまりを守る大切さをまとめる。

（4）指導上の留意点及び工夫

展開例２の③では、約束やきまりをまもることは、みんな（集団）のために大事であることに気付くようにするため、どうしてそのように考えたのか理由を問うことによって、「（自分を含めた）みんなのため」という視点を引き出すようにする。

〔本文イラストは和井内良樹による〕